

若宮啓文著

忘れられない国会論戦

再軍備から公害問題まで



中公新書

1206



中公新書 1206

若宮啓文著

忘れられない国会論戦

再軍備から公害問題まで

中央公論社刊

若宮啓文（わかみや・よしぶみ）

1948年（昭和23年），東京に生まれる。70年，東京大学法学部を卒業し，朝日新聞記者に。横浜，長野支局を経て75年から東京本社で政治取材にあたる。西部本社社会部，政治部デスクなどを務め，93年4月から論説委員。

著書『ルポ現代の被差別部落』（朝日文庫）

忘れられない国会論戦

中公新書 1206

©1994年

検印廃止

1994年10月15日印刷

1994年10月25日発行

著 者 若宮啓文

発行者 嶋中行雄

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替 00120-4-34

Printed in Japan

ISBN4-12-101206-2

まえがき

「会議においては、文書を朗読することができない。但し、引証又は報告のためにする簡単な文書は、この限りでない」

これは参議院規則第一〇三条である。衆議院規則第一三三条もほぼ同様だ。国会での議員発言では、原則的に「朗読」が禁じられているのである。

だが、国会にそんな規則があることを知っている人が、一体どれほどいるだろうか。長年、政治の取材をしてきた私も、恥ずかしながら、そんな条文があるとは最近まで気がつかなかった。現実には、国会審議に「朗読」があまりにも多いからにはかならない。

閣僚が答弁する姿を思い出してほしい。官僚のつくった答弁資料を棒読みするケースが目につかぶに違いない。あれは、ほとんど朗読ではないか。答弁だけではない。質問のほうも、本会議の代表質問はほとんどが朗読だし、本来なら丁々発止行うはずの委員会での質問すら、アドリブのきかない朗読みたいなものが目につく。

自分の頭で考え、自分の言葉で語り、相手の出方に応じて政府の矛盾をついていく、そんな生き生きとした質問にお目にかかることは、悲しいかな稀である。党や国会の政策調査スタッフばかりか、中には答弁側の官僚に質問をつくってもらう議員すら少くないのが実情だからだ。

答弁する首相や閣僚も審議への影響を考えるあまり、質問者を刺激しないよう、ほとんど当たり障りのない答弁に終始するから、迫力ないことおびただしい。まして「順送り」や「滞貨一掃」の人事による閣僚ともなれば、何をかいわんやだ。私自身、長く国会質疑を見てきて、議論の退屈さで眠くなることしばしばであった。

だが、国会にも眠気を覚ますような論戦がなかったわけではない。いや、はらはらしたり、どきどきしたりする論戦があったはずなのだ。そこで、そんな醍醐味を味わってみようと、戦後の国会議事録や録音テープなどから「忘れられない論戦」を拾い出し、さわりを再現してみた。併せて当時の新聞や雑誌、書物に関係記事や当事者の証言を探したほか、何人かの関係者には改めてインタビューをして論議のいきさつや背景を探ってみたのが本書である。

そんな作業をしてみると、語り種になっている対決や、思わぬハプニングに発展した質疑、あるいは味わい深い隠れた論戦が、案外多いことに気づいた。聞かせる議論、迫力満点の攻防、ほろりとさせる問答などが、かつてはそれなりにあったのである。

四〇年近くに及んだ自民党の一党支配が崩れ、非自民政権から自社連立政権へと、日本の政治

は大きな混乱期に入った。だが、国会論議の外で行われる権力闘争の派手さに比べて、国会という舞台上での論戦はまだまだ寂しい。政治にわくわくするような論戦がほしい、そんな思いでこの書をつづった。

本書では、いくつかの代表的な論戦を試みに五つのタイプに分けてみた。従って、必ずしも年代別には並べておらず、体系だったテーマ構成にもなっていない。多少行きつ戻りつの感をもたれるかもしれないが、巻末の年表も参照しつつ、それぞれ半世紀に及ぶ戦後政治史の断片だと考えて、気軽に読み進めていただければ幸いだ。

取り上げた質疑は、たまたま私が気づいたり、興味を持ったりしたものに過ぎず、これだけをもって「忘れられない国会論戦」とするのは大変おこがましい。これは「忘れられない論戦」のごく一部だと考えて許していただきたい。論戦のひとつづつを、今日の政治状況と重ね合わせてお読みいただければ、興味は倍加するものと期待している。

（文中、敬称は略させていただきます）

目次

まえがき

第一章 がっぷり四つの因縁対決 3

芦田均 vs. 吉田茂

元首相が挑んだ再軍備論争 4

残された質問草稿 自衛権の解釈 首相と刑
事被告人 ポケット論争 再軍備をめぐる
向こうが白ならこちらは黒

石橋政嗣 vs. 中曾根康弘

「非武装中立」で丁々発止の攻防 30

武蔵・小次郎の決闘 安保五人男と風見鶏
「大東亜戦争」への反省 「敗北論」なのか
冷戦下五五年体制の中の論戦

第二章 命取りの失言

..... 57

木村禰八郎・加藤勘十 vs. 池田勇人

放言連発でついに大臣解任 58

貧乏人は麦を食え インフレの木村 自殺の

五人や一〇人…… 畏にはまった記者会見

加藤勘十の蒸し返し 本会議の激しい駆引き

わからない政治家の運命

西村栄一 vs. 吉田茂

「バカヤロー」で衆院解散へ 87

異様な伏せ字 「あなた」から「君」へ 吉

田・鳩山の確執 前代未聞の首相懲罰 「最

大の奇怪事」 盛り上がった西村人気

第三章 これぞ爆弾質問..... 105

河野一郎 vs. 吉田茂

対米債権の文書片手に「答弁したまえ」 106

白熱の応酬 黙阿弥もののスゴ味 宙に浮い

た四七〇〇万ドル レフェリーストップ 権

力闘争の道具

岡田春夫 vs. 佐藤栄作

松本清張が提供した「三矢研究」暴露

126

朝鮮戦争再来の想定をした作戦 国家総動員体制？ 韓国情勢の推移に伴う国策要綱 作家の資料提供

石橋政嗣 vs. 宮沢喜一

公害Gメンの協力で政府が降参

150

一日二〇万トンの廃液たれ流し 六月一五日のスタンプ 癒着の摘発 「はずれ役人」の捜査

第四章

ホロリとグサリ、涙の質疑……………171

羽生三七 vs. 鳩山一郎

「日ソ」で総理大臣が泣いた

172

社会党からの激励 車椅子で走り回る首相
三冊のノート 政治責任論

片山哲・河上丈太郎 vs. 岸信介

「戦争責任」で忠告のうめき声 192

「護憲」論争 十字架委員長の自責 顧みて
やましきことなし この精神を岸君は忘れては
ならぬ

第五章

異色の本会議演説……………213

田中角栄のデビュー

自由討議で聞かせた「血の叫び」 214

新生議会の目玉、自由討議 民主的議会の理想
政治の原動力としての「金」 定着しなかった
自由討議

中曽根康弘の反ソ演説

与党の代表質問が全文削除に 233

日ソ共同宣言批准をめぐる 反共意識とスタ
ンドブレ！ フルシチョフのナイフ 吉田派
の造反 正力松太郎への依頼

池田勇人 vs. 河上丈太郎

テロに倒れた浅沼委員長の追悼合戦

250

日比谷の惨劇 池田の勝負 影の原稿書き

河上の吊い 三一年前の再現 戦慄の体験談

もう一人の裏方

おわりに

271

戦後政治の主なきごと

278

参考文献

287

写真提供・朝日新聞社

忘れられない国会論戦

第一章 がっぷり四つの因縁対決



1951年秋の臨時国会で吉田茂首相に質問する芦田均
(下はその草稿)

芦田均 vs. 吉田茂 元首相が挑んだ再軍備論争

残された質問草稿

一〇五ページに及ぶ分厚い毛筆の質問草稿が、そっくりいまも残っている。普通より一回り以上も大きい二〇〇字詰め of 升目の原稿用紙。そこに連なる墨の文字は、几帳面に楷書で書かれており、だれの目にも読みやすい。いったん書いた文章を消した棒線の数々、そして升目からはみ出して挿入された文字の列——原稿の主はかつての民主党総裁であり、三年前に首相を退いていた芦田均である。

質問の相手はときの首相、吉田茂だった。占領統治から日本の独立を実現したサンフランシスコ講和条約と、引き続き米軍の日本駐留を決めた日米安保条約の批准をテーマに開かれた一九五



(左) 芦田均
(右) 吉田茂

一年（昭和二六年）秋の臨時国会。これは、そこで演じられた大物対決の下書きなのだ。

草稿を所蔵する芦田の孫・下河辺元春によると、筆跡からして半分以上は芦田の自筆であり、残りは秘書に口述筆記させたものだ。今でも語り種になっている芦田質問の熱気が、この原稿からも伝わってくる。

芦田は首相まで務めながら、その後、昭電疑獄で逮捕される屈辱を味わっており、このときは一審係属中の身であった。戦前から外交官としてライバル同士だった吉田と芦田だが、片や四〇日前にサンフランシスコで歴史的な講和をなしとげた得意絶頂の最高権力者であれば、一方は失意の中にある元首相——その二人が相まみえたのが、この質疑だったのである。

対決の場合は、衆院に設けられた両条約の特別委員会だった。一〇月一八日、芦田は基本的には両条約を評価しつつ、日本の「再軍備」を正面から求めて論戦を挑む。両雄の対決として前評判も上々だったと見え、委員会室は開始前から超満員となった。記者席は秋だというのに上着を脱いでも汗だくのありさまで、文字通り押し合いへし合いの騒ぎだった。

おもむろに姿を見せた芦田を見守るように、委員会室の後部には若かりし中曽根康弘ら国民民主党の面々がずらり陣取っていた。そして吉田が悠然と現れる。こちらには、はち切れんばかりの資料をひざに抱えた外務省条約局長の西村熊雄らが後ろに控え、張り詰めた空気が漂っていた。満場かたずをのむ中、芦田が質問の口火を切った。

芦田 今回の平和条約は、わが国の歴史における画期的の記録であり、永久に民族の脳裏に残るべき記念塔であります。(略)しかしながら、平和条約はなお幾多の未解決の問題を残しておるばかりでなく、日米安全保障条約は世にもまれなる条約であり、しかもすべての細目を行政協定に譲っておる関係上、国会において政府の説明を待たなければ、無条件に賛意を表することはできないことはもちろんであります。

芦田はまず沖縄や小笠原諸島が米国の「信託統治」とされたことに不満を表明した。さらに、講和条約に参加しなかった中国との交渉は中共政府を相手とするか、国民党政府を相手とするか、などと政府の見解を質したあと、本題に入っていた。

自衛権の解釈

芦田は、安保条約が「日本の防衛のためであると同時に、アメリカの太平洋防衛の第一線を固めるためのもの」であるにもかかわらず、条約を読むと「徹頭徹尾、日本がアメリカに対して懇請した形でできあがっている」と不満を表した。とくに日本側が米軍の駐留に「希望」を表明した条約前文について「日本政府がアメリカ政府に懇請した、慇懃な態度が、まるでテレビジョンでながめるごとく目に映る」と皮肉ったのだ。

講和条約は革新陣営の主張した「全面講和」の道を排して、ソ連など共産圏の参加しない「片